



文具等を受け取り、笑顔の子どもたち（ボゴ市、フィリピン）
Students holding school kit on their hands (Bogo City, the Philippines)

Newsletter

Table of Contents Vol.38 (Jan, Feb 2014)

- 日本：東日本大震災被災者支援事業
- ベトナム：学校と地域での防災推進事業
- ミャンマー：災害危険地域における防災能力向上支援
- フィリピン：台風 30 号（ハイエン）の被災学校への支援開始
- バングラデシュ：学校での防災トレーニング
- 本部事務局：国内イベント報告

- Japan : Support project for Great East Japan Earthquake and Tsunami
- Vietnam: MOFA project on capacity building for DRR
- Myanmar : JICA Grass Roots Partnership Project
- Philippines: JPF project for typhoon affected schools
- Bangladesh: DRR education training at school
- Headquarters : Event Report in Japan



(特定非営利活動法人 SEEDS Asia)

〒658-0072

2-1-21-401 Okamoto,

Higashi Nada ku, Kobe, Japan

神戸市東灘区岡本2-11-21-401

Tel: 078-766-9412

Fax: 078-766-9413

Email: rep@seedsasia.org

Web: www.seedsasia.org

Facebook: <http://www.facebook.com/>

pages/SEEDS-Asia/206338119398923

【チャーチワールドサービス（CWS）支援事業】

気仙沼市・西条市との防災教育交流ワークショップ

2014年1月20日及び21日の2日間、京都大学において、宮城県気仙沼市、愛媛県西条市、京都大学地球環境学堂国際環境防災マネジメント論分野、そしてSEEDS Asiaにて、これまで実践してきた防災教育の経験について共有するとともに、今後の課題とその改善策について話し合うワークショップを実施しました。気仙沼市は、震災を踏まえて教育研究員が防災教育プログラムの開発を進めており、特に今年度は最低限実施すべき防災教育の内容について検討を進めています。一方、西条市は、2004年の台風による被災の経験から防災教育を積極的に進めてきました。特に、小学校6年生において全市民的に防災教育を実施し、最後には子ども防災サミットを開いて子ども達が考える防災宣言を行うといった12歳教育と呼ばれる取組が世界的にも有名になっています。SEEDS Asiaからは、ベトナム・ダナン市での防災拠点学校づくりの経験を共有しました。

ワークショップでは、気仙沼市、西条市ともに、双方が取り組んでいる防災教育の実践について、お互いにもっと勉強しようことで、さらにイノベティブ（革新的）な防災教育の実践につながるのではないかと、という結論に至り、今後も双方の交流を続けていく意志を確認しました。



参加者での集合写真



ワークショップでの白熱した議論

2014年2月5日から8日、気仙沼市中心地にある条南中学校2年生の生徒達4名と学区内の自治会長らが神戸を訪問しました。気仙沼の復興のために何が 필요한のか、震災を忘れないために何が出来るのか、世代を超えた交流の中で持ち帰って実行できる何かを探す旅です。

6日、到着後、神戸三宮の街並みを震災直後の写真を見ながら見学、その後「人と防災未来センター」を訪問しました。生々しい地震の記憶が共感に変わっていきました。

7日、たかとりコミュニティセンターにて、毎年新長田駅前にて震災祈念イベントとして実施されている「1.17KOBEに灯りをinながた」の歴史とろうそくづくりを学ぶワークショップを行いました。カトリックたかとり教会の敷地にあるコミュニティセンターにはアジア各地の人種が混在しており仏教の僧侶も出入りしています。そんな中でのろうそくづくりは楽しいながらも時に厳しい叱咤の音が響き、中学生たちは終始真剣な表情で取り組んでいました。

8日、長田区の東尻池郷土館を訪問し、地元の長田中学校の生徒が年配の方にパソコンを教え、年配者は地域のことを生徒に教えるという交流活動に参加しました。まちぐるみでまち歩きを企画したりと防災に熱心な地域です。条南の生徒も交流活動の中で友好を深めました。

震災当時、小学校5年生だった小松彩香さんは「皆が仲良い町で、だからこそ月に2回の防災訓練なども可能なのだと思う。コミュニティが強くなるために皆が知恵を出し合っている。私達も気仙沼の未来像を時間をかけてでも作っていきたい。」と語りました。昨年からの復興委員会を立ち上げた条南中学校、今年も新たな活動を展開していくこととなります。生徒達は、生憎の大雪の中、期待と希望を胸に気仙沼への帰路に着きました。



中学生らがろうそくづくりに挑戦



神戸の復興した街並みを視察

気仙沼市教育委員会成果発表会

2月14日、気仙沼市教育研究員による、1年間の防災教育研究の成果発表会があり、気仙沼市内のすべての幼・小・中学校から1名の教員が出席し、研究成果が共有されました。

教育研究員は、「地域と連携した学校を核とする防災体制づくり」及び「防災学習シートの活用を通じた防災教育の改善」について研究成果を発表し、その後、京都大学地球環境学堂国際環境防災マネジメント論講座の松浦研究員による指導・講評が行われました。特に、防災学習プログラムのガイドブックである「防災学習シート」は、昨年度に開発されたものから改良が加えられ、特に各学校で最低限実施すべき内容の明示や、実践を踏まえたワーク資料等の補助教材の充実等が図られ、出席者からも称賛の声が聞こえました。教育研究員達は、発表会まで、学校での授業終了後、自主的に集まり、深夜まで議論を重ね、防災教育プログラムの開発に勤めました。その努力に敬意を表します。

防災学習シートは、京都大学とSEEDS Asiaにより英訳を行い、国内外に共有を図っていくことにしています。



教育研究員による発表



教育研究員・SEEDS Asia スタッフの集合写真

 ベトナム

JICA 主催大学生スタディツアー

2014年2月19日、国際協力機構（JICA）主催のスタディツアーに参加する22名の大学生がタムキーの事務所に来所されました。本スタディツアーは、将来国際機関や国際協力の分野で活動を希望している学生が現地で活躍する青年海外協力隊やNGOを訪問し、視察やインタビューを通して国際協力の現場を理解するという目的で、公益財団法人日本ユースリーダー協会に委託されて行われています。

現在、SEEDS Asiaの事務所はクアンナム省教育訓練局（DOET）内に構えているため、我々の活動紹介はDOETの会議室をお借りして実施しました。最初にDOETの職員による歓迎の挨拶をいただき、続いて参加者からの挨拶、そしてSEEDS Asiaの事業概要の発表を行いました。

質疑応答では、学生からは「防災教育の評価指標の設定方法」や「防災研修中の教員の姿勢」等、様々な質問や意見が挙げられ、彼らの熱意を感じました。これまで実施してきた事業の成果や教訓を次世代に共有するとともに、国際NGOとしての使命を改めて考えさせられる良い機会となりました。



22名の学生と青年海外協力隊

【日本NGO 連携無償資金協力事業】

クアンナム省沿岸地域における学校と地域にでの防災推進事業

<コーディネーション・ワークショップの開催>

2013年12月11日、在ベトナム日本国大使館での署名式及びクアンナム省人民委員会の事業承認手続きを終え、2014年2月27日にクアンナム省タムキー市においてコーディネーション・ワークショップ（WS）を開催し、ハノイやダナンからも含め、総勢74名の関係者が参加しました。

本事業では、クアンナム省の教育訓練局（DOET）と農業農村開発局（DARD）がカウンターパートとなり、学校防災を中心とした地域防災力の向上を目指した活動を実施します。このことから、本WSには、ハノイよりベトナム教育訓練省（MOET）のLe Trong Hung 副局長並びに農業農村開発省（MARD）のVan Phu Chinh 副局長を迎え、防災・気候変動対策にかかる国家政策に基づいた、中央レベル、省レベル、郡レベルの取り組みについて情報共有がなされました。

また、SEEDS Asiaより、日本における防災教育の経験や教訓及びクアンナム省における事業計画が紹介されました。タムキー市の人民委員会やディエンバン郡の教育訓練局より「学校とコミュニティとの連携方法をどのように図っていくのか」、「クアンナムに適した教材をどのように作成していくのか」等の質問が挙げられ、参加者の防災教育に対する関心や実施意欲の高まりを感じました。

現在はWSを終え、DOETやDARDとともに、防災モデル校及びモデル地域の選定に取り掛かっています。

ら計 18 名や教員ら 193 名が参加しました。その後、移動式防災教室が 6 タウンシップ内の 30 校を訪問し、トレーナー養成講座に参加した教員を中心に、生徒に対する防災知識の普及を図りました。



Mr.Hung (MoET) による発表



防災プログラムを実施する教員と生徒たち



質疑応答で回答する DoET の局長



クンジャンゴン・タウンシップでは、タウンシップ長も移動式防災教室に参加し、周囲に積極的な参加を呼びかけました



ミャンマー

【JICA 草の根技術協力事業：災害危険地域における防災能力向上支援プロジェクト】

水上・陸上移動式防災教室を用いた防災トレーニング 【於：クンジャンゴン、ミャウンミヤ、パティン、ヒンダタ・タウンシップ】

JICA 草の根技術協力支援事業の一環として、移動式防災教室を用いて 2 地域 6 タウンシップにて防災トレーニングを実施しました。

陸上移動式防災教室 (MKRC: Mobile Knowledge Resource Centre) は、昨年 12 月 9 日～ 14 日にクンジャンゴン・タウンシップを、1 月 7 日～ 13 日にはエヤワディ地域のヒンダタ・タウンシップを、1 月 20 日～ 27 日には同じくエヤワディ地域のパティン・タウンシップを訪問しました。一方、水上移動式防災教室は、昨年 12 月 9 日～ 13 日にミャウンミヤ・タウンシップ、12 月 23 日～ 31 日にパティン・タウンシップ、1 月 22 日～ 31 日にラプタ・タウンシップを訪問し、延べ数 2,001 名 (内訳：教員 358 名、生徒：1,512 名、PTA や各タウンシップ防災委員会等の地域住民：131 名) の参加を得ました。

それぞれのタウンシップでは、最初の 1 日半には、主に教員やタウンシップの防災委員会メンバーを対象に防災の概念と共に地域と学校の連携の必要性や、避難訓練の実施、そして各校の防災計画の立案手法を習得するトレーナー養成トレーニングを開催し、各タウンシップの防災委員会などが

防災活動センター発足に向けたクンジャンゴンの防災委員会との話し合い

ヤンゴン地域のクンジャンゴン・タウンシップでは、昨年 11 月 11 日に開催された同タウンシップ防災委員会メンバーとの協議を皮切りに、防災活動センターの設営に向けた取り組みが本格的に始まっています。

12 月 30 日には、タウンシップの防災委員会のメンバーと学校の教員が集合し、今後の計画や構想を話し合いました。続いて、1 月 8 日には、今後のトレーニング計画に向けて、具体的な同タウンシップのハザード (自然災害) のリスク分析、そして災害後の緊急対応期、復旧復興期、次の災害に向けた減災の取り組みや備えの段階に於いて必要となる自助、共助、公助の力、そして必要となるネットワークは何かを協議しながら纏めました。



フィリピン

【ジャパン・プラットフォーム（JPF）事業】

台風30号（ハイエン）の被災学校への支援開始

2013年11月初旬に発生した史上最大級の台風30号（ハイエン）により、フィリピンでは甚大な被害を受けました。OCHAが1月28日に発行したSituation Report No. 34によると、死者6,201名、行方不明者1,785名、避難者410万人、家屋損壊110万棟という被害状況です。さらに、教育分野に関しては、教育クラスターによると、2013年12月17日現在、2,537校が被災し、このうち、未だ1,999校に支援が届いていない、という状況が続いていました。

そこで、SEEDS Asiaは、1月16日から3月31日の期間、ジャパン・プラットフォーム（JPF）の助成により、フィリピン・台風ハイエン被災地における教材配布と防災教育の事業を実施する運びとなりました。まず、1月20日から京都大学地球環境学堂国際防災マネジメント論講座の研究室と合同で調査を実施し、その結果を踏まえて、具体的な教育支援プロジェクトを展開していきます。

現地調査は、台風が直撃したレイテ島及びセブ北部を対象に実施しました。レイテ島では、多くの支援が入っているものの、未だ不足しており、特に学校に関しては、被災した建物の修繕・再建や机・椅子などの備品がかなり不足していることが把握されました。セブ北部の役所や学校は、台風により屋根が吹き飛ばされ使用できなくなった建物も多く見られ、あまり支援が届いていないように見受けられました。学校は天井や壁、窓が壊れた状況で授業を再開し、子ども達はノート・鉛筆が不足している状況で授業を受けていました。学校の校長や教育委員会の教育長へのヒアリングでは、災害については理科の授業で実施しているが、視覚的に子ども達に教えられる教材が不足している実態についても把握できました。

今後、本事業の状況について随時報告させていただきます。みなさまのご支援をどうかよろしくお願いいたします。



被災した学校の片づけを生徒たちも手伝い



壁も窓も修復されていない状態で授業が再開

被災小学校での教材等の配布

2月21日、教材等をセブ北部の被災した小学校に運びました。学校では人手が足りなかったため、生徒達も手伝ってくれました。これらの教材等は、2月26日および27日の2日間にかけて、児童及び教員に配布を実施しました。

26日にはボゴ市のラバズ小学校とマリンジン小学校の2校で配布しました。当日は、教育委員会、ボゴ市役所をはじめ、学校の校長、教員、そして児童から歓迎を受け、教材を受け取るとみな笑顔を見せてくれました。ボゴ市は台風により被害を受けたにもかかわらず、支援が少ない地域で、特にマリンジン小学校の校長は、初めてSEEDS Asiaが訪問した時、涙を流して感謝を述べていました。今日、この配布を終え、一人の教員が校長と私達に「こうやって支援を受けて、もう校長は泣くことはありません」と笑顔で話してくださったのも、また印象的でした。

27日には、ダンバンタヤーン村のソミンバン小学校とビトゥン小学校の2校で教材一式を配布しました。ソミンバン小学校には、村長が、多忙の中、時間を調整して顔を出してくださいました。この学校に村長が来ることは初めて、とのこと。

教材の配布の前に、SEEDS Asiaスタッフにより、ジャパン・プラットフォームを通して、日本からの支援であることを説明しました。また、この配布は、教育委員会、市・村、学校といった現地側のサポートがなかったら実現しません。そういった現地側の協力に対する感謝も述べました。

配布の際は、助成してくださったJPF、現地でサポートをしてくださった教育委員会、そしてSEEDSのロゴが入ったステッカーを子ども達に渡しました。先生が「日本からの支援に対して感謝の気持ちを込めてステッカーを貼るように」と子ども達に説明してくださいました。最後に、子ども達は全員で「ありがとうございます」と日本語で御礼を述べてくれました。

この配布にご協力くださったみなさまに感謝致します。



本事業について説明する SEEDS Asia スタッフ



受け取った教材を掲げて喜ぶ児童達

当初「地震は怖い」と言っていた生徒も、トレーニング後には事前の備えの大切さについて理解してくれました。トレーニング実施後のアンケートでは、最初は43%の生徒が地震について「(とても)よく知っている」と答えましたが、最後には96%に向上。85%の生徒が学校や自宅ですべての備えをしたいと答えました。

生徒へのトレーニング後、保護者向け意見交換会を実施し、生徒へのトレーニング内容に加え、親の責任としての防災のメッセージを伝えました。配られたレスキューホイッスルを手に最悪の事態を想像したのでしょうか、保護者からは学校を安全な建物にするための意見がたくさん寄せられました。またバングラデシュの状況に合わせた『防災ハンドブック』を作成・配布し、地震の前後でできることを学んでもらいました。地震に対する意識も47%から92%へと向上し、更なる学校やコミュニティでの防災トレーニングを要望する声が数多く聞かれました。

※「紙ぶるる」：地震時の建物の揺れや耐震化について、実際に見て触れながら学ぶことができる防災教育教材（内閣府防災情報のページより <http://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/torikumi/kth19001.html>）



紙ぶるるで安全な建物について考える生徒たち



バングラデシュ

【JICA 技術協力事業】

生徒と保護者に事前の準備の大切さを伝えます

2014年1月、ダッカ市内の3つの中学校で防災教育トレーニングを実施しました。1,600万人が暮らすというバングラデシュの首都ダッカでは、急激な人口増加による慢性的な建物不足と脆弱な建物の多さが指摘されています。狭い土地に建物がひしめき合い、多くの人通りのあるダッカでもし地震が起こったら…。

バングラデシュには活断層がいくつかあり、これまで約100年周期で大規模な地震が起きています。最後の地震は1897年のアッサム地震。いつ地震が起ころうとおおしくありません。しかし、このような規模の地震を経験した人は殆どいません。毎年のように被害のある沿岸地域でのサイクロンに比べ、地震に対する人々の意識は決して高いとは言えません。

当 JICA 技術支援プロジェクトは公共建築物の耐震改修のための能力向上を目指しており、3年間の活動を経て少しずつその成果が出ています。

今回は、バングラデシュでの防災意識向上のため、学校での防災トレーニングを実施しました。

生徒向けのトレーニングでは、3つの中学校でクラスをひとつひとつまわり、生徒に近い距離でトレーニングを実施。実際の地震の揺れのビデオ、地震発生メカニズム、防災対策、非常用持ち出し袋や家族の避難場所の確認など事前にできる準備などを中心に話し、「紙ぶるる（防災教育教材）」を使って強い建物とそうでない建物の揺れの違いを体感してもらいました。



初めての防災トレーニングを受ける保護者たち

【SEEDS Asia は JICA 技術協力事業「自然災害に対応した公共建築物の建設・改修能力向上プロジェクト (Project for Capacity Development on Natural Disaster-Resistant Techniques of Construction and Retrofitting for Public Buildings : CNCRP) にプロジェクト広報として参加しています。】

国内イベント報告

防災イベント「イザ！美かえる大キャラバン！2014」

ここ数年にわたり SEEDS Asia が出展している防災イベントの「イザ！カエル大キャラバン」ですが、今回は2014年1月26日（日）に神戸ミュージアムロード（神戸市灘区・中央区）の活性化を行う「美（み）かえるカラフルプロジェクト」との連携イベントとして JICA 関西にて開催されました。

この防災イベントは、いらなくなったおもちゃと交換したポイント、プログラムに参加して集めたポイントを使って、違うおもちゃと交換できる「かえっこオークション」をメインに、子どもたちと保護者が一緒に楽しみながら防災を学ぶことができるイベントです。

SEEDS Asia では、3名の学生ボランティアの方々の協力を得て、今年も「親子で学ぼう地震で変わるお部屋の安全」のプログラムを実施しました。子どもたちに、空き箱等を利用して作った部屋の模型に、家具を自由に配置してもらった後、その部屋を揺すって地震を再現してもらいます。揺すった後の部屋の様子を見て、家具の配置に関する工夫や転倒防止対策の重要性を知って、実際に家庭でも地震対策に取り組んでもらうことを狙っています。

当日は、多くの子どもたちが保護者や兄弟姉妹と一緒に参加してくれました。「もしこのベッドに寝ていたとしたら、どうなると思う？」などと声をかけると、「ベッドから落ちてけがをする。」「倒れたタンスの下敷きになる。」などと実際の部屋の様子を想像して答えてくれました。また、スタッフが家具の固定方法の説明を行うと、親子で熱心に聞いてくれました。日頃から地震に備えることの大切さについて身をもって感じてもらえたイベントとなりました。



防災模型で学ぶ子どもたちと、SEEDS Asia スタッフ

国際協カイイベント「ワン・ワールド・フェスティバル」

SEEDS Asia にとって3回目の出展となる「ワン・ワールド・フェスティバル」は、2014年2月1日（土）、2日（日）の両日、大阪国際交流センターにて開催されました。

この「ワン・ワールド・フェスティバル」は関西最大規模の国際協カイイベントで、広く国際協力の大切さを知ってもらい、また活動への参加のきっかけにしてもらうことを目的としています。

両日とも肌寒いながらも好天に恵まれ、二日間で延べ17,500名の来場がありました。今年も恒例の「クイズ・ラリー」に出題し、幼児からご年配まで幅広い年齢層の方々が SEEDS Asia のブースを訪問してくださいまし

た。今回は、ベトナムで発生した洪水による死亡率における子どもの割合（正解：80%）をクイズで出したところ、ほとんどの方が不正解の「40%」と答え、正解を伝えるとその現実に衝撃を受けた様子でした。

活動紹介ブースでは、東北、ベトナム、ミャンマー、バングラデシュでの活動に加え、昨年11月、台風第30号で被災したフィリピンの現状をパネル等で紹介しました。フィリピンについて、来場者からは「被災から数か月経っているのに、状況は一向に変わっていないことに驚いた。」「旅行で訪れたことがあるので、心配している。」などの声が聞かれました。また、活動内容を紹介した各国の写真パネルに見入ったり、活動現場で実際に使用している子供向けの防災すごろくやカードゲームを興味深そうに手に取ったりする姿が見られました。



来場者に事業説明をする SEEDS Asia スタッフ

The Great East Japan Earthquake

Project Funded by Church World Service (CWS)

DRR educational exchange workshop between Kesennuma City and Saijo City

With attendance of the board of education from two cities, Kesennuma and Saijo, the laboratory of International Environment and Disaster Management (IEDM) of Kyoto University and SEEDS Asia, a DRR educational exchange workshop was held at Kyoto University on 20th and 21st January 2014. This workshop was offered in order to share experiences of each in DRR education and to discuss challenges and resolutions in the future. In Kesennuma, Research-Teachers have been developing DRR educational program on the basis of lessons learnt from the Great East Japan Earthquake and Tsunami (EJET). In this fiscal year, they have been focusing on checking up on the minimum standard of DRR education. As for Saijo, DRR education has been promoted from their experience of being hit by a typhoon in 2004. Especially for the 6th graders, DRR education has been provided at school throughout the city, and Children's DRR Summit has been held at the end of the program to announce the DRR declaration by children. This approach is called "education for 12 year-olds" and becoming well-known in the world. SEEDS Asia staff members introduced a project of building DRR core schools in Danang City, Vietnam.

At the end of the workshop, Kesennuma City and Saijo City concluded that both cities will continue sharing to learn the practice of their programs so that their DRR education can become more innovative.



Workshop Participants



Discussing at the workshop

Study Visit of Jonan Junior High School Students to Kobe

From 5th to 8th February 2014, four students in the eighth grade from Johan Junior High School in Kesennuma, leaders of the neighborhood associations and the other concerned parties within its school district made a visit to Kobe. "What would it take for recovery in Kesennuma?" "What could we do to keep the tsunami in memory and to contribute to the community?" Through exchanging beyond generations in this study visit, the participants were expected to find ideas that they can bring back to their community to put in practice.

On Day 2 of the trip, as soon as arriving at Kobe, the party toured Sannomiya, downtown Kobe, comparing with the photos taken after the disaster in 1995, and they visited Disaster Reduction and Human Renovation Institution (DRI). Participants shared painful memories of the disaster and felt sympathy for victims of the Great Hanshin-Awaji Earthquake.

On Day 3, a workshop was offered to the students and the party to learn the background of the Great Hanshin-Awaji Earthquake memorial event "1.17 KOBE Lights for Nagata" and to make memorial candles used in the event. Takatori Community Center, where the workshop was held, is located in the site of Takatori Catholic Church. In this Nagata Ward, a diversity of races, nationalities and cultures from Asian countries reside. Students enjoyed making candles in a different atmosphere from their own hometown.

On Day 4, the party visited an intergenerational exchange activity between local junior high school students and elderly people from Nagata, where residents have been committed to DRR activities. In the exchange event, local students taught how to use PCs to the elder participants and learned local history from them. Jonan students joined this activity.

Ayaka Komatsu, a girl student from Jonan Junior High, was the fifth grader in the year of the Great East Japan Earthquake, 2011. Komatsu says, "Since residents in Nagata are getting along with each other, it makes possible

to conduct DRR drills twice a month. I can see every resident try to provide good ideas to make their community more disaster-resilient. We want to create and pursue a vision of Kesennuma no matter how long it takes.”

Last year, Jonan Junior High School established the Student Committee of Reconstruction. Through the committee, the school will develop new activities for reconstruction. With high hopes and expectations, the students left Kobe for their hometown in snowing.



Students making memorial candles



Visiting reconstructed area in Kobe

presentation, the Research-Teachers voluntarily had gathered after their classes and devoted themselves to discuss until late at night to develop DRR educational program. Their effort deserves respect.

This DRR Learning Guide is scheduled to be translated into English by Kyoto University and SEEDS Asia to share with those abroad.



Presentation by a Research-Teacher



Research-Teachers and SEEDS Asia staff

Presentation Session by Kesennuma Research-Teachers

On 14th February, with attendance of one Research-Teacher from each of kindergarten, elementary and junior high school in Kesennuma City, a presentation session on DRR education was held to share their educational outcomes.

In the beginning, the Research-Teachers made a presentation of “Building a DRR school-centered framework in cooperation with communities” and “Improvement of DRR education using DRR Learning Guide” . In response, Mr. Matsuura, a researcher of International Environment and Disaster Management (IEDM) of Kyoto University, commented on the presentation session. In particular, DRR Learning Guide, a guidebook of DRR learning program, was praised for being improved from the original version published in the last fiscal year, as well as clarifying the contents as minimum standard to be taught at school and enhancing support materials. To prepare for the



Japanese students study tour hosted by JICA

On 19th February 2014, a party of 22 university students visited SEEDS Asia office located in the building of Department of Education and Training of Quangnam. This visit was part of a study tour hosted by Japan International Cooperation Agency (JICA). The students participated in the tour for the purpose of understanding the international cooperation activities through visiting and interviews with Japanese volunteers and those work in NGOs, and they are eager to work in the international organizations or get involved in the international cooperation activities in the future. This study tour was entrusted to Development Association for Youth Leaders (DAY).

At the meeting room, after students exchanged greetings with DOET, SEEDS Asia introduced our activities in Vietnam to them.

During the question-and-answer session, students eagerly joined the discussion, giving their opinions and asking many questions such as "how to set a goal for DRR education" and "attitude of teachers during DRR education training". Through this exchange program, all the participants shared the outcomes and lessons learned from our project, and it was a good opportunity to think about our mission as an international NGO.



22 Japanese students and members of Japan Overseas Cooperation Volunteers

Capacity building for Disaster Risk Reduction at schools and communities in the coastal area of Quangnam Province

<A coordination workshop held>

Followed by the approval from Quangnam Provincial People's Committee and the signing ceremony at the Japanese Embassy in Hanoi on 11th December 2013, Coordination Workshop (WS) was held on 27th February 2014, hosted by DOET, DARD* and SEEDS Asia in Tam ky City of Quang Nam Province, in which 74 officials from Danang and Hanoi attended.

In this project, SEEDS will carry out the activities aimed at the capacity building for Community Based on Disaster Risk Management (CBDRM) focused on School DRR education in cooperation with DOET and DARD as our counterparts. At the workshop, representatives from two authorities were invited; Mr. Le Trong Hung from Ministry of Education and Training and Mr. Van Phu Chinh from Ministry of Agricultural and Rural Development. Participants exchanged a lot of information on approaches based on the national strategy on climate change that the state, the province and the district are addressing.

In the session, SEEDS Asia introduced our experiences and lessons learned from DRR education and CBDRM activities in Japan and our activities in Quang nam. In response to this, the attendees made many questions on "How to ensure linkages between schools and communities on DRR education activity" (People's committee staff of Tam ky city) or "How to create DRR education materials suitable to situation of Quang nam" (BoET**staff of Dien ban district). This workshop successfully brought heightened attention from the attendees to DRR education activities.

* DARD: Department of Agricultural and Rural Development

** BoET: Bureau of Agricultural and Rural Development



Presentation by Mr.Hung from MoET



Chief of DoET answering a question



Teachers and students participate in DRR program



Myanmar

"Project for Capacity Building on DRR in Disaster Risk Area" supported by JICA

[Visiting schools with MKRC & WKRC to conduct DRR trainings \[in Kungyangon, Myaungmya, Pathein and Hindatha townships\]](#)

As a part of the "Project for Capacity Building on DRR in Disaster Risk Area" supported by JICA, DRR trainings were conducted with MKRC (Mobile Knowledge Resource Centre) & WKRC (Water Knowledge Resource Centre) in six townships in two regions.

MKRC visited Kungyangon township in Yangon Region (9th to 14th December 2013), Hindatha township in Ayeyarwady region (7th to 13rd January) and Pathein township in Ayeyarwady region (20th to 27th January 2014). In the end of the last year, WKRC sailed to Myaungmya township (9th to 13rd December), and Pathein township (23rd to 31st December) and Labutta townships (22nd to 31st January, in 2014). Totally 2,001 people participated in the trainings (teachers: 358, students:1,512, PTA and Township Disaster Preparedness Committee:131).

In the beginning of trainings, "Trainings of Trainers" (ToT) were conducted for one and half day in each township in order to share the basic concept of DRR as well to learn the importance of collaboration in DRR between schools and communities. Analysis on hazards and capacity and evacuation drills were also implemented with session for learning how to make action planning and its framework. For this ToT process, 193 teachers participated, including 18 members from communities who belong to township disaster management committee. Then, MKRC & WKRC visited totally 30 schools after the ToT sessions, the teachers who joined ToT sessions led the DRR training and shared what they have learnt from MKRC&WKRC to students.



The Township officer U Kyaw Zaya Lin from Kungyangon Township attended the ToT session by MKRC

[Discussion with Kungyangon Disaster Preparedness Committee and stakeholders to launch DRR activity centre](#)

After the first meeting with township government officials in Kungyangon Township on 11th November 2013, a series of discussions on DRR Activity Centre with township disaster management committee were started.

On 30th December as the second meeting, the township disaster management committee and teachers from the target area were gathered to discuss and share the broad idea on DRR Activity Centre. Then the third meeting was held to conduct the detail hazard risk analysis and "cross needs assessment" based on the stage of disaster management (response, rehabilitation, mitigation and preparedness) and Self help, Mutual help, Public help and Network help were held on 8th January.



The Philippines

Project Funded by Japan Platform Project (JPF)

Launch our initial project to support affected schools and students by the typhoon Haiyan in the Philippines

Super Typhoon Haiyan, which occurred in early November 2013, pummeled the Philippines leaving severe damage. According to Situation Report issued by the United Nations Office for the Coordination of Humanitarian Affairs (OCHA) dated 28th January, there have been 6,201 dead, 1,785 missing, 4.1 million refugees and 1.1 million houses damaged. With regard to education, by 17th December of 2013, 2,537 schools were affected, of which the 1,999 schools have not received any assistance yet and cannot continue their education, according to the education cluster.

In response to this, SEEDS Asia decided on a project to distribute education supplies and conduct DRR education in the Philippines from 16th January to 31st March by the grant of the Japan Platform (JPF). First, an initial survey was conducted jointly with the laboratory of International Environment and Disaster Management (IEDM) of Kyoto University starting 20th January. In the light of the results, SEEDS Asia will proceed specific educational support projects.

This survey was carried out in Leyte and the northern part of Cebu, heavily affected region by the typhoon. In Leyte, there were a lot of aid organizations, however, it did not seem to be enough. In particular, it was found that repair or reconstruction work of affected school buildings and school equipment such as desks and chairs were badly in short supply. In the northern part of Cebu, many buildings of city halls or schools which roofs were flown away by the typhoon are not able to use, however, support for it seems not enough. Schools resumed even though ceilings, walls and windows of the buildings are not repaired and school children are facing a severe shortage of educational supplies such as notebooks and pencils. According to a hearing investigation with school principals and school superintendent of local DepEd, disaster basic knowledge has been taught in science class at school, however, schools have lack of visual materials to learn about disaster.

Progress of this project will be reported in future. We would appreciate your kind and warm support for this project.



Students helping cleaning debris at an affected school



School resumed without repairing walls or windows

Distribution of Education Supplies at Affected Elementary Schools

Education supplies were delivered to affected elementary schools in the northern part of Cebu on 21st February. School students also helped to unload boxes. And finally students and teachers in 2 cities received the goods on 26th and 27th February.

On 26th February, SEEDS Asia successfully distributed the school kits to 2 schools in Bogo City, namely La Paz Elementary School and Malingin Elementary School. The distribution event was attended by representatives from DepEd, officials from Bogo City Government, principals, teachers and students. Everyone was smiling in receiving the kit. Though Bogo City was heavily affected by the typhoon, it has received little assistance. The principal of Malingin Elementary School expressed her appreciation with tears in her eyes, saying SEEDS Asia is the first organization to visit the school after the typhoon. After the event, one of the teachers impressively spoke to the principal and SEEDS Asia staff with a smile, "our principal will never cry anymore because we received such a wonderful support from SEEDS Asia today" .

On 27th February, education supplies were distributed at 2 schools in Daanbantayan Municipality, namely Somimbang Elementary School and Bitoon Elementary School. According to the school, it was the first opportunity for them to receive a visit from Mayor at Sominbang



JICA Technical Assistance Project

To tell students and parents the importance of preparedness

Elementary School who attended the distribution event. Before distributing, staff of SEEDS Asia delivered a speech to explain that this project is carried out with funding from Japan Platform (JPF), which gathered donation from Japanese people and companies, and that this distribution would not be possible without local support such as Department of Education (DepEd), City/Municipality and Schools, and closed the speech with appreciation to local people for their cooperation.

As a memento of this project, logoed stickers of 3 organizations (JPF, DepEd and SEEDS) were handed out together with the school supplies. Teachers explained to students, "You should put this sticker on your school kit with your appreciation to Japan for their support!" At the end of the event, all the students said thank you in Japanese, "Arigato-gozaimasu" .

Thank you and relevant organizations for your cooperation.

At three junior high schools in Dhaka, DRR training program was conducted. Dhaka, the capital city of Bangladesh with a population of 16 million, has a chronic shortage of housing supply due to rapid population increase and a large number of poorly-constructed buildings. In such a narrow city which is densely-packed with houses and buildings, what would it be like if an earthquake occurs?

Bangladesh has some active faults and powerful earthquakes hit the country on a hundred-year cycle in the past. The last was the Assam earthquake of 1897. Though it is overdue for a quake, few people in Bangladesh experienced such a massive earthquake and people's earthquake awareness is not necessarily high enough compared with cyclones that strike coastal areas almost every year.

This JICA technical assistance project started three years ago with an aim to develop the capacity of local authority for earthquake retrofit and is now gradually achieving some positive results.

To raise people's DRR awareness in Bangladesh, SEEDS Asia conducted DRR training at school.

SEEDS Asia staff visited each class at three junior high schools to conduct trainings face to face. The training program included viewing video footage of the actual earthquake and a lecture on mechanism of earthquake, DRR measures, and preparedness such as an emergency pack and family meeting about area for evacuation. Students also experienced the difference of quake between an earthquake-proof building and a vulnerable one by using "Kami-Bururu" , a DRR learning kit.

At the beginning, students said that an earthquake is scary, however, they seemed to understand the importance of preparedness through the training. According to the results of questionnaire after the training, 96 percent of students answered "well understand an earthquake" , while 43 percent answered so before the training. Eighty-five percent answered they want to prepare for an earthquake at school and home.

After the training, a parents meeting was held to report on the content of the training and educate them on parental DRR responsibility. Once a rescue whistle was distributed to each parent, which might make them imagine the worst, they provided many ideas to make their school safe. Furthermore, "DRR Handbook" edited in light of the situation in Bangladesh was printed and distributed to promote them to learn preparedness and



SEEDS Asia staff explaining the project



Students smiling with school kits distributed

post-earthquake measures. As a result of the meeting, the percentage of those who answered “well understand an earthquake” increased from 47 percent to 92 percent. Also many parents desired further trainings at school and communities.



Students learning DRR



Parents receiving DRR training

[SEEDS Asia is a JICA Expert Team member(Project publicity)of the project, "Project for Capacity Development on Natural Disaster-Resistant Techniques of Construction and Retrofitting for Public Buildings:CNCRP"]

Iza! Mi-Kaeru-Dai-Caravan 2014, DRR Event for Children

For the last several years, SEEDS Asia has set a booth in “Iza! Kaeru-Dai-Caravan” . This year, it was held on 26th January at JICA Kansai in collaboration with an event “KOBE MUSEUM ROAD Mikaeru colorful project” which promotes vitalization of KOBE MUSEUM ROAD (a business and educational district in Nada-ward and Chuo-ward, Kobe City).

A variety of DRR educational programs were conducted, including “Kaekko (exchange) Auction” , a main event in which children get toys in exchange for toy points they get during the event (by participating in each program, or in exchange for toys they don’ t use anymore, certain amount of points are given). Thus, children are able to learn DRR with their parents in an enjoyable format.

With the cooperation of 3 student volunteers, SEEDS Asia carried out a program, “Let’ s make a resilient house for disaster.” Through the program, children and their parents were expected to learn an importance of preparedness against disasters, including careful furniture arrangement or fall-prevention device installation to furniture. Following is how the program was conducted:

1. Arrange paper-made furniture inside a miniature house made of cardboard.
2. Shake the house strongly by hands to simulate an earthquake.
3. Observe the situations inside the house after the quake.

During the event, SEEDS Asia’ s booth was attended by many children with their parents and siblings. “What if you were sleeping on this bed?” When SEEDS Asia staff questioned, they pictured the situation of the room and answered, “I would fall off the bed and get injured.” or “I would be trapped under the drawers.”

The participating families listened to SEEDS Asia staff carefully about how to fix furniture against overturning in the room. It seemed to become a good opportunity to help them recognize the importance of the preparedness in case of an earthquake.



Children participating in the program



SEEDS Asia staff member explaining projects

ONE WORLD FESTIVAL

It was the third time for SEEDS Asia to open a booth in "ONE WORLD FESTIVAL" which was run by the One World Festival Committee. This year, it was held on 1st and 2nd February at the International House Osaka. This event is the biggest one in Kansai area to promote global and regional issues in an easy-to understand way, as well as to promote intercultural understanding. Enjoying the chilly but good winter days, roughly 17,500 people visited the event in 2 days.

SEEDS Asia prepared a quiz at the booth and many in wide age range visited us for quiz rally. The quiz for this year was about ratio of children in mortality rate by floods in Vietnam. Most of visitors answered "40%" (correct answer is 80%). To know the answer, they seemed to be shocked at the reality. As well as the activities in Tohoku, Vietnam, Myanmar and Bangladesh, photo panels of the Philippines hit by the typhoon Haiyan in November 2013, were displayed at the booth, introducing the current situation.

Seeing the display, visitors left comments; "I was surprised to know the situation hasn't changed even a couple of months after the disaster." " Since I have visited the country in the past, I am really concerned." Visitors were also staring carefully at photo panels of the activities in other countries and picked up study tools such as board games and card games.